

有 田 川 町 財 務 書 類

(概 要 版)

～統一的な基準による財務書類～

平成28年度



平成28年度有田川町の財務書類（概要版）

地方自治体の会計は、単式簿記による現金主義会計を採用しており、予算の適正、確実な執行などの面では優れていますが、単年度の現金収支を示すものであることから、資産や負債等のストック情報や、現金の移動を伴わない減価償却費、引当金などのコスト情報が把握できないといった課題があります。これを補完するため、ストック・フロー情報を把握し、発生主義、複式簿記といった企業会計の手法を活用した地方公会計制度が推進され、全地方自治体において新たな統一の基準に基づく財務書類を作成することとなりました。町では、平成28年度決算からこの「統一の基準」により財務書類を作成します。

本年度の概要については、次のとおりです。

（１）財務書類の作成

財務書類の体系は、次の4表とこれら財務書類に関連する事項についての附属明細書、注記となります。

- ① 貸借対照表（BS：Balance Sheet バランスシート）
- ② 行政コスト計算書（PL：Profit and Loss statement プロフィット&ロスステートメント）
- ③ 純資産変動計算書（NW：Net Worth statement ネットワースステートメント）
- ④ 資金収支計算書（CF：Cash Flow statement キャッシュフローステートメント）

（２）財務書類の対象となる範囲

財務書類の対象となる範囲については、以下の図のとおりです。

連結団体

- ・和歌山県市町村総合事務組合
- ・和歌山地方税回収機構
- ・有田周辺広域圏事務組合
- ・有田郡老人福祉施設事務組合
- ・有田聖苑事務組合
- ・和歌山県後期高齢者医療広域連合
- ・一般財団法人有田川町ふるさと開発公社
- ・有田観光物産センター株式会社

全体会計

- ・有田川町国民健康保険事業特別会計
- ・有田川町介護保険事業特別会計
- ・有田川町後期高齢者医療特別会計
- ・有田川町簡易水道事業特別会計
- ・有田川町公共下水道事業特別会計
- ・有田川町農業集落排水事業特別会計
- ・有田川町簡易排水事業特別会計
- ・有田川町浄化槽事業特別会計
- ・有田川町かなや明恵峡温泉特別会計
- ・有田川町特別養護老人ホーム等事業特別会計
- ・有田川町水道事業会計（法適用）
- ・有田川町岩倉財産区管理会特別会計
- ・有田川町粟生財産区会計
- ・有田川町城山山林財産区会計
- ・有田川町八幡山林財産区会計
- ・有田川町安諦山林財産区会計

一般会計等

- ・一般会計

(3) 財務書類の概要

1. 作成基準日 (出納整理期間収支を含む)

平成29年3月31日 (平成28年度決算)

2. 基本情報

人口 (H29年1月1日住民基本台帳)	27,130人
面積	351.84 km
職員数 (H28.4.1普通会計一般職員等)	321人

類似団体区分	町村V-0
標準財政規模	9,982,062千円
財政力指数 (平成28年度単年)	0.342

実質赤字比率	-
連結実質赤字比率	-

実質公債費率	10.3%
将来負担比率	33.1%

経常収支比率	88.3%
--------	-------

3. 財務書類4表の構成の相互関係

【財務書類の金額単位：百万円】 (注) 四捨五入の関係で一致しない部分があります。また、金額のない科目は「-」とし、金額が0円ではないが表示単位の関係で「0」としている科目があります。マイナスの値は「▲」で表示しています。

貸借対照表 年度末時点までこれまで積み上げてきた資産とその負債をどのような財源で賄ってきたかを表すもの。

区分	一般	全体	連結	区分	一般	全体	連結
資産 (これまで形成してきた資産)				負債 (将来世代が負担する額)			
1 固定資産	48,239	73,512	74,986	1 固定負債	22,772	38,611	38,941
①有形固定資産	39,080	63,280	64,494	①地方債	19,874	32,241	32,411
②無形固定資産	13	21	21	②退職手当引当金	2,883	2,995	3,133
③投資その他の資産	9,145	10,211	10,471	③その他	15	3,375	3,397
2 流動資産	4,944	6,002	6,579	2 流動負債	3,135	4,106	4,260
①現金預金	852	1,654	2,086	①1年以内償還予定地方債	2,505	3,242	3,271
②未収金	17	258	267	②未払金	-	184	292
③基金	4,075	4,075	4,207	③その他	630	680	697
④その他	▲1	14	18	負債合計	25,907	42,718	43,201
				純資産	27,275	36,796	38,364
				(現在までの世代が負担した額)			
				純資産合計	27,275	36,796	38,364
資産合計	53,182	79,514	81,565	負債・純資産合計	53,182	79,514	81,565

資金収支計算書 貸借対照表における「資金」について、その収支を性質別に表すもの。

収入区分	一般	全体	連結	支出区分	一般	全体	連結
業務活動収入	13,007	21,577	25,847	業務活動支出	11,408	18,728	22,906
(うち臨時収入)	(553)	(553)	(573)	(うち支払利息)	(258)	(464)	(466)
投資活動収入	1,316	1,729	1,774	投資活動支出	2,550	4,938	4,990
(うち基金取崩)	(230)	(337)	(380)	(うち基金積立金)	(1,142)	(1,227)	(1,276)
財務活動収入	1,768	3,149	3,149	財務活動支出	2,344	2,971	3,008
収入合計	16,091	26,455	30,770	支出合計	16,302	26,637	30,904

区分	一般	全体	連結
本年度資金収支	▲211	▲182	▲135
前年度未資金残高	602	1,377	1,756
本年度未歳計外現金残高	460	460	464
本年度末資金残高	852	1,654	2,086

区分	本年度資金収支		
	一般	全体	連結
業務活動	1,599	2,848	2,941
投資活動	▲1,233	▲3,209	▲3,216
財務活動	▲577	178	140
合計	▲211	▲182	▲135

行政コスト計算書 経常的な活動に伴う費用とそれに対応する収入を表すもの。

区分	一般	全体	連結	区分	一般	全体	連結
経常費用 A	12,425	20,681	24,826	経常収益 B	891	1,837	2,245
①人件費	2,761	3,124	3,379				
②物件費等	3,695	5,551	6,194				
③その他業務費用	308	563	581				
④補助金等・社会保障給付	3,554	11,412	14,634				
⑤他会計繰出金等	2,107	31	38				
				区分	一般	全体	連結
				純経常行政コスト C	11,534	18,844	22,580
				(A-B)			
				臨時損失 D	1,778	1,790	1,790
				臨時利益 E	3	3	3
				純行政コスト F	13,309	20,631	24,368
				(C+D-E)			

純資産変動計算書 純資産が1年間でどのような要因で増減したかを表すもの。

区分	一般	全体	連結	純資産の増減要因	一般	全体	連結
純行政コスト F	▲13,309	▲20,631	▲24,368	資産評価差額 I	-	-	-
財源 G	13,695	21,341	25,120	無償所管換等 J	▲670	▲421	▲421
①税収等	10,690	15,002	16,964	その他 K	-	-	▲44
②国県等支出金	3,005	6,339	8,156				
本年度差額 H	386	709	752	本年度純資産変動額 L	▲285	288	287
(G-F)				(H+I+J+K)			

区分	一般	全体	連結
前年度末純資産残高	27,560	36,508	38,077
本年度純資産変動額 L	▲285	288	287
本年度末純資産残高	27,275	36,796	38,364

(4) 財務書類の内容

貸借対照表

平成29年3月31日 現在

(注) 四捨五入の関係で一致しない部分があります。

【財務書類の金額単位：百万円】

区分	一般	全体	連結	区分	一般	全体	連結
資産（これまでに形成してきた資産）				負債（将来世代が負担する額）			
1 固定資産	48,239	73,512	74,986	1 固定負債	22,772	38,611	38,941
①有形固定資産	39,080	63,280	64,494	①地方債	19,874	32,241	32,411
・事業用資産	32,195	33,670	34,859	②退職手当引当金	2,883	2,995	3,133
土地	14,179	14,521	15,074	③その他	15	3,375	3,397
建物	15,930	17,063	17,687				
工作物	2,087	2,087	2,099				
その他	-	-	-				
・インフラ資産	6,430	29,139	29,139				
土地	2,156	3,533	3,534				
建物	613	912	912				
工作物	3,537	23,940	23,940				
その他	124	754	754				
・物品	453	471	496				
②無形固定資産	13	21	21				
③投資その他の資産	9,145	10,211	10,471				
うち基金	8,108	9,105	9,351				
2 流動資産	4,944	6,002	6,579	2 流動負債	3,135	4,106	4,260
①現金預金	852	1,654	2,086	①1年以内償還予定地方債	2,505	3,242	3,271
②未収金	17	258	267	②未払金	-	184	292
③基金	4,075	4,075	4,207	③その他	630	680	697
うち財政調整基金	4,075	4,075	4,207				
④その他	▲1	14	18	負債合計	25,907	42,718	43,201
				純資産	27,275	36,796	38,364
				・固定資産等形成分	52,314	77,588	79,195
				・余剰分（不足分）	▲25,039	▲40,791	▲40,830
				純資産合計	27,275	36,796	38,364
資産合計	53,182	79,514	81,565	負債・純資産合計	53,182	79,514	81,565

「貸借対照表」は、会計年度末の町の財政状態（資産・負債・純資産の残高・内訳）についての情報を明らかにすることを目的としています。左右の合計額が等しくなり、資産と負債のバランスを把握することができます。

◆資産

町が行政サービスを提供するために保有し、あるいは将来サービスを提供するために用いることができる資源のことです。

- ・事業用資産
庁舎・学校・保育所などのインフラ資産以外の有形固定資産
- ・インフラ資産
道路、公園、水道、下水道など
- ・物品
取得価格が50万円以上のもの
- ・無形固定資産
ソフトウェア
- ・投資その他の資産
有価証券、出資金、特定目的基金、長期延滞債権など
- ・流動資産
現金預金、財政調整基金、未収金など

◆負債

町のこれまでの行政活動により有ることとなった、将来世代が負担する債務のことです。
主に地方債がありますが、引当金なども計上されます。

◆純資産

町のこれまでの行政活動の結果としての「資産」から将来世代が負担する債務である「負債」を差引きしたものです。
純資産は、これまでの世代の負担によって蓄積された、将来世代が利用可能な資源の蓄積額であると考えられます。

行政コスト計算書

自 平成28年4月 1日
至 平成29年3月31日

(注) 四捨五入の関係で一致しない部分があります。

【財務書類の金額単位：百万円】

区分	一般	全体	連結	区分	一般	全体	連結
経常費用 A	12,425	20,681	24,826	経常収益 B	891	1,837	2,245
業務費用	6,764	9,238	10,154	使用料及び手数料	134	901	952
①人件費	2,761	3,124	3,379	その他	757	936	1,293
職員給与費	2,206	2,524	2,710				
賞与等引当金繰入額	163	186	197				
退職手当引当金繰入額	-	2	2				
その他	392	412	470				
②物件費等	3,695	5,551	6,194				
物件費	2,312	3,029	3,494				
維持補修費	348	587	588				
減価償却費	1,027	1,925	1,974				
その他	8	10	138				
③その他業務費用	308	563	581				
支払利息	258	465	466				
徴収不能引当金繰入額	-	3	3				
その他	50	95	112				
移転費用	5,661	11,443	14,672				
補助金等	2,951	10,803	9,855				
社会保障給付	603	609	4,779				
他会計への繰出金	2,092	-	-				
その他	15	31	38				

区分	一般	全体	連結
純経常行政コスト C (A-B)	11,534	18,844	22,580
臨時損失 D	1,778	1,790	1,790
臨時利益 E	3	3	3
純行政コスト F (C+D-E)	13,309	20,631	24,368

「行政コスト計算書」は、会計年度中の町の費用と収益の取引高を明らかにすることを目的としています。費用や収益には、発生主義による減価償却費や徴収不能引当金繰入額などの現金支出を伴わないコストが含まれ、これまでの現金主義による歳入歳出決算書では見えにくかった行政コストの情報を、より正確に把握することが可能となっています。

◆経常費用とは、毎会計年度、経常的に発生するものをいいます。経常費用は、人件費、物件費等の「業務費用」と補助金等、社会保障給付等の「移転費用」に分類します。このように資本形成や地方債元金償還に関わる経費を除く、行政サービスを提供するための経費となります。

◆経常収益とは、毎会計年度、経常的に発生するものをいいます。内訳は「使用料及び手数料」及び「その他」に分類されます。税収等や国県等補助金といった直接的な対価性のない収入を除いた、行政サービスの対価としての使用料や手数料、財産収入や諸収入などとなります。

純資産変動計算書

自 平成28年4月 1日
至 平成29年3月31日

(注) 四捨五入の関係で一致しない部分があります。

【財務書類の金額単位：百万円】

区分	一般	全体	連結	純資産の増減要因	一般	全体	連結
純行政コスト(▲) F	▲ 13,309	▲ 20,631	▲ 24,368	資産評価差額 I	-	-	-
				無償所管換等 J	▲ 670	▲ 421	▲ 421
財源 G	13,695	21,341	25,120	その他 K	-	-	▲ 44
① 税金等	10,690	15,002	16,964				
② 国県等支出金	3,005	6,339	8,156				
本年度差額 H (F+G)	386	709	752	本年度純資産変動額 L (H+I+J+K)	▲ 285	288	287

区分	一般	全体	連結
前年度末純資産残高	27,560	36,508	38,077
本年度純資産変動額 L	▲ 285	288	287
本年度末純資産残高	27,275	36,796	38,364

「純資産変動計算書」は、会計年度中の町の純資産の変動、内部構成の変動を明らかにすることを目的としています。純資産の増加要因としては、税金等、国県等支出金の財源の固定資産等形成分への流入、寄付等による資産の無償取得、過年度取得資産に係る固定資産台帳価格の修正（増加）などがあります。純資産の減少要因としては、資産の売却や除却、過年度取得資産に係る固定資産台帳価格の修正（減少）などがあります。これらは、貸借対照表の純資産合計とその内訳である「固定資産等形成分」と「余剰分（不足分）」に連動します。

- ◆固定資産等形成分とは、資産形成のために充当した資源の蓄積をいい、原則として金銭以外の形態（固定資産等）で保有されます。具体的には、貸借対照表の固定資産と短期貸付金、基金の合計となります。
- ◆余剰分（不足分）とは、町の費消可能な資源の蓄積をいい、原則として金銭の形態で保有されます。具体的には、貸借対照表の純資産額合計から、固定資産等形成分を差し引いた額となります。地方債の発行により社会資本を形成などを行っている団体では、この額がマイナスとなる場合が多く基準日時点における将来世代の負担となる地方債償還、引当金などの金銭等の必要額を表しています。

資金収支計算書

自 平成28年4月 1日
至 平成29年3月31日

(注) 四捨五入の関係で一致しない部分があります。

【財務書類の金額単位：百万円】

収入区分	一般	全体	連結	支出区分	一般	全体	連結
業務活動収入	13,007	21,577	25,847	業務活動支出	11,408	18,728	22,906
業務収入	12,454	21,024	25,274	業務支出	11,408	18,728	22,906
税収等収入	10,699	14,875	16,867	業務費用支出	5,747	7,284	8,240
国県等補助金収入	1,371	4,705	6,575	人件費支出	2,770	3,121	3,376
使用料及び手数料収入	134	913	965	物件費等支出	2,668	3,604	4,160
その他の収入	250	531	867	支払利息支出	258	464	466
臨時収入	553	553	573	その他の支出	51	95	238
				移転費用支出	5,661	11,443	14,666
				補助金等支出	2,951	10,803	9,855
				社会保障給付支出	603	609	4,779
				他会計への繰出金支出	2,902	-	-
				その他の支出	15	31	32
				臨時支出	-	0	0
				災害復旧事業費支出	-	-	-
				その他の支出	-	0	0
投資活動収入	1,316	1,729	1,774	投資活動支出	2,550	4,938	4,990
国県等補助金収入	1,081	1,360	1,362	公共施設等整備費支出	1,408	3,711	3,714
基金取崩収入	230	337	380	基金積立金支出	1,142	1,227	1,276
貸付元金回収収入	2	2	2	投資及び出資金支出	-	-	-
資産売却収入	3	3	3	貸付金支出	-	-	-
その他の収入	-	27	27	その他の支出	-	-	-
財務活動収入	1,768	3,149	3,149	財務活動支出	2,344	2,971	3,008
地方債等発行収入	1,768	3,076	3,076	地方債等償還支出	2,338	2,964	2,993
その他の収入	-	73	73	その他の支出	7	7	15
収入合計	16,091	26,455	30,770	支出合計	16,302	26,637	30,904

区分	一般	全体	連結
本年度資金収支	▲ 211	▲ 182	▲ 135
前年度末資金残高	602	1,377	1,756
本年度末歳計外現金残高	460	460	464
本年度末資金残高	852	1,654	2,086

区分	本年度資金収支		
	一般	全体	連結
業務活動	1,599	2,848	2,941
投資活動	▲ 1,233	▲ 3,209	▲ 3,216
財務活動	▲ 577	178	140
合計	▲ 211	▲ 182	▲ 135

「資金収支計算書」は、会計年度中における町の現金の収入と支出の収支を、「業務活動収支」、「投資活動収支」、「財務活動収支」の3つに分類し、資金の利用や獲得能力を明らかにすることを目的としています。行政コスト計算書には、発生主義による現金支出を伴わないコスト等が含まれますが、資金収支計算書では、現金の収支のみが記載されることから貸借対照表の現金預金に連動します。

- ◆業務活動収支とは、行政サービスの提供に関する経常的、臨時的な行政活動に伴う資金収支をいいます。
- ◆投資活動収支とは、公共施設整備や基金積立・取崩など、町の資産の増減に伴う資金収支をいいます。
- ◆財務活動収支とは、地方債発行や元金償還など、町の負債の増減に伴う資金収支をいいます。

(5) 財務書類を活用した財政分析

現在、財務書類の分析指標としては、次のようなものがあります。

これらは、各団体の統一的な基準による財務書類の数値や指標が出そろった後に、類似団体や過去の指標などと比較して、「有田川町の現在の状況」を分析することができます。尚、平成28年度から「統一的な基準」に基づく財務書類を作成したため、平成27年度以前の数値等は記載していません。

1. 資産形成度・・将来世代に残る資産はどのくらいあるのか

(1) 住民一人当たり資産額

貸借対照表上の資産総額から住民一人あたりの資産額を算定します。この指標により、他の団体と比較が容易になります。

	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
資産総額 (百万円)	A				53,182	79,514
人口 (人)	B				27,130	27,130
住民一人当たり資産額 (万円)	A/B				196.0	293.1

(2) 歳入額対資産比率

貸借対照表上の資産総額が何年分の歳入に相当するかを表すものです。

	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
資産総額 (百万円)	A				53,182	79,514
歳入総額 (百万円)	B				16,693	27,832
歳入額対資産比率 (年)	A/B				3.2	2.9

*歳入総額とは、資金収支報告書の業務収入、臨時収入、投資活動収入、財務活動収入、前年度末資金残高の合計

(3) 有形固定資産減価償却率

有形固定資産のうち、償却資産（建物や工作物など）の耐用年数に資産の取得からどの程度経過しているかを表します。

この指標が高いほど、公共施設等が老朽化している傾向にあり、施設の更新・整備の目安となります。

	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
減価償却累計額 (百万円)	A				24,187	38,546
有形固定資産 (百万円)	B				46,355	83,157
有形固定資産減価償却率 (%)	A/B				52.2	46.4

*有形固定資産とは、有形固定資産合計－土地等の非償却資産＋減価償却累計額

*参考

区分	一般	全体	
減価償却累計額	24,187	38,546	物品除く
土地等非償却資産	16,912	18,669	物品、建設仮勘定含む

(4) 有形固定資産の行政目的別割合

有形固定資産の行政目的別の割合を算出することにより、行政分野ごとの社会資本形成の比重の把握が可能となります。

また経年比較することにより行政分野ごとに社会資本がどのように形成されてきたかを把握することができます。

区分	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
生活インフラ・国土保全					14.2%	29.5%
教育					41.7%	25.7%
福祉					9.9%	7.4%
環境衛生					2.5%	16.8%
産業振興					8.8%	6.4%
消防					6.8%	4.2%
総務					16.1%	10.0%
全体					100.0%	100.0%

区分	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
					5,561千円	18,641千円
					16,278千円	16,278千円
					3,868千円	4,706千円
					966千円	10,609千円
					3,434千円	4,073千円
					2,669千円	2,669千円
					6,302千円	6,303千円
					39,080千円	63,280千円

2. 世代間公平性・・将来世代と現世代との負担の分担は適切か

(1) 純資産比率

地方債の発行を通じて、将来世代と現世代の負担の配分を行うとすれば、純資産の変動は、将来世代と現世代との間で負担の割合が変動したことを意味します。

たとえば、純資産の増加は、現世代の負担によって将来世代も利用可能な資源を蓄積したことを意味する一方、純資産の減少は、将来世代が利用可能な資源を現世代が費消して便益を享受していると捉えることができます。

	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
純資産 (百万円) A					27,275	36,796
資産総額 (百万円) B					53,182	79,514
純資産比率 (%) A/B					51.3	46.3

(2) 将来世代負担比率

有形固定資産などの社会資本等に対して、将来の償還等が必要な負債による形成割合を算出することにより、社会資本等形成に係る将来世代の負担の程度を把握することができます。

	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
地方債残高 (百万円) A					15,888	28,992
有形・無形固定資産合計 (百万円) B					39,093	63,301
将来世代負担比率 (%) A/B					40.6	45.8

*参考

区分	一般	全体	
特例地方債残高	6,491	6,491	臨時財政対策債等

*地方債残高は、特例地方債の残高を控除した後の額

3. 持続可能性(健全性)・・財政に持続可能性があるか

(1) 住民一人当たり負債額

負債額を人口で除して住民一人当たり負債額とすることにより、他の団体と比較が容易になります。

	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
負債合計 (百万円) A					25,907	42,718
人口 (人) B					27,130	27,130
住民一人当たり負債額 (万円) A/B					95.5	157.5

(2) 基礎的財政収支(プライマリーバランス)

資金収支計算上の支払利息支出を除いた業務活動収支と投資活動収支の合計額を算出することにより、地方債等の元利償還額を除いた歳出と、地方債等発行収入を除いた歳入のバランスを表す指標となります。プラスであれば、その年の行政サービスを借金などの将来世代への負担を増やすことなく、現役世代の税収等で賄えているといえます。

	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
業務活動収支 (百万円) A					1,857	3,312
投資活動収支 (百万円) B					▲ 321	▲ 2,319
基礎的財政収支 (百万円) A+B					1,536	993

*業務活動収支・・支払利息支出を除く。

*投資活動収支・・基金積立金支出及び基金取崩収入を除く。

(3) 債務償還可能年数

債務の償還能力を表す指標で、償還財源の上限額を全て債務償還に充当する場合、何年で現在の債務を償還できるかを表します。この指標が低いほど、償還能力が高いといえます。尚、臨時財政対策債発行可能額を分母に加えない場合の債務償還可能年数を参考までに算出しています。

	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
将来負担額 (百万円) A					36,043	36,043
充当可能基金残高 (百万円) B					10,640	10,640
業務収入等 (百万円) C					13,007	21,577
臨時財政対策債発行可能額 (百万円) D					448	448
業務支出 (百万円) E					11,408	18,728
債務償還可能年数 (年)	$(A-B)/(C+D-E)$				12.4	7.7
(参考) 債務償還可能年数 (年)	$(A-B)/(C-E)$				15.9	8.9

*将来負担額及び充当可能基金残高は、地方公共団体財政健全化法上の将来負担比率の算定式による。

*業務収入は、資金収支計算書における業務収入による。 業務収入+臨時財政対策債発行可能額

*業務支出は、資金収支計算書における業務支出による。

4. 効率性・行政サービスは効率的に提供されているか

(1) 住民一人当たりの行政コスト

行政コスト計算書上の純行政コストから住民一人当たりの行政コストを算定し、行財政の効率性の度合いを表します。

	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
純行政コスト (百万円) A					13,309	20,631
人口 (人) B					27,130	27,130
住民一人当たりの行政コスト (万円) A/B					49.1	76.0

5. 弾力性・資産形成を行う余裕はどのくらいあるのか

(1) 行政コスト対税収等比率

資本形成を伴わない行政コスト（純経常行政コスト）に対して、どれだけ当年度の負担で賄われたかを判断する指標で、この指標が100%に近いほど資産形成の余裕度が低いとされ、100%を上回ると過去から蓄積された資産が取り崩されたことを表します。

	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
純経常行政コスト (百万円) A					11,534	18,844
一般財源等 (百万円) B					13,695	21,341
行政コスト対税収等比率 (%) A/B					84.2	88.3

6. 自律性・歳入はどのくらい税収等で賄われているか

(1) 受益者負担比率

行政コスト計算書の経常収益は、使用料及び手数料など行政サービスに係る受益者負担の金額を表し、これを経常費用と比較することにより、行政サービス提供に対する直接的な負担の割合を算出します。

	平成26年度		平成27年度		平成28年度	
	一般会計等	全体	一般会計等	全体	一般会計等	全体
経常収益 (百万円) A					891	1,837
経常費用 (百万円) B					12,425	20,681
受益者負担比率 (%) A/B					7.2	8.9